

「世界の多言語・多文化社会研究」国際シンポジウム 要旨

台湾における多文化主義をめぐる寛容・非寛容  
**Tolerance and Intolerance of Multiculturalism in Taiwan**

金戸 幸子 (KANETO, Sachiko)

90年代に先住民族の文化的権利の回復から始まった台湾の多文化主義社会構築に向けた取り組みは、現在は先住民族だけにとどまらず、より幅広い社会集団に対し、法律や政策の実現を通じて文化の多様性を許容・発揚する方向へと展開している。こうしたなかで、戦後台湾の特殊な政治体制も関係し、外国人を受け入れるホスト社会としての社会環境の整備に遅れを取ってきた台湾でも、近年では急増する新移民を対象とした政策も急速に整備されつつある。

しかしながら、外国人の就労や外国籍配偶者の国籍取得などにかかわる法律や政策をみていくと、一見、外国籍の人々にも寛容な社会である印象を与える反面、移住者のナショナリティや在台居留身分によって、その位置付けや待遇に明らかに意図的な違いも看取されることなどから、移民の受け入れを必ずしも積極的に奨励している国家ではないという側面も多分に持っていることがうかがえる。つまり、国際社会での“生き残り”戦略もかけて多元性をアピールするというコスモポリタニズムの精神に基づいて多文化主義が称揚されている側面と、他方では伝統文化の維持、少子高齢化に伴う人口減少や人口の「素質」への懸念から、「多元文化」をスローガンにして良質な外国籍配偶者を国民化すべく配偶者に厚遇な家族主義的な移民政策が展開されているといえる。

本報告では、新移民にスポットを当てることにより、このような二面性を持った台湾の多文化主義について、その背景も含めて台湾特有の文脈に即した視点とトランスナショナルな文脈から複眼的に捉えながら、寛容と非寛容の境界を検討する。